川野京輔探偵小説選Ⅱ　目次

童貞作家……1
深夜の令嬢……15
夜行列車の見知らぬ乗客……22
雪の夜の目撃者（よ）……30
消えた街……38
外人部隊脱出……56
エル・リコの叛乱……79
コールサイン殺人事件……99
団兵船（だんぺいせん）の聖女（マドンナ）達……115
青い亡霊……138
女性アナウンサー着任せず……153
狙われた女……165

彼女は時報に殺される……184
三十一号国道の裸女……195
夜行列車殺人事件……207
おそろしい囁き……218
あわれな女……230
犬神部落の幽鬼……238
ロケットの怪紳士……251
衛星船の女……260
都会の魔女たち……277
〔再録〕『コールサイン殺人事件』解説　辻 真先……294
【解題】　日下三蔵……297

凡　例

一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。

一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。

一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。

一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。

一、あきらかな誤植は訂正した。

一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。

一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

童貞作家

1

「ＲＩＶＩＥＲＡ」という雑誌がある。

所謂、エロ雑誌と呼ばれる種類のものであるが、その範疇にある雑誌の中ではかなりの水準を保っていた。

編集部は大阪にある。

春の増刊号の発行を間近に控えて、篠原編集長は原稿の整理に没頭していた。

何しろ、こうした雑誌には仮令、頼んでみても一流の名の通った作家が原稿を渡してくれる気遣もなく、またその必要もない。

文壇の中心から去ったかつての流行作家、新鋭作家や、新聞雑誌記者くずれ辺りが、まず最上の、いわばこれら雑誌の呼物であり、その他は、無名の投稿家の作品で誌面を埋める。

ところが、一度でも、まともな原稿で飯を喰った事のある連中は、文章こそ手の込んだ巧みな表現を用いるが、内容は雑誌の性質を充分計算に入れているはずなのに、どうも中途半端で、読者に与える刺戟が弱い。

一方、全国、いたる処から郵送されてくる原稿は、その大半が自己の異常な体験を基にしているだけに、アブノーマルな、どぎつい印象はあったが、何分、文章が未熟で、訴える迫力に乏しく、中には、普通の便箋に、区切りもなく、だらだらと書いて寄こす者すらある位いだった。

しかしその内容は、変態性欲の記録、なかんずく、サド・マゾの実例、女の縛り方等々、常規を逸した現代の性異端者の告白であるから興味はある。

そこで、これらの原稿を、雑誌を求める読者の眼先に提供するとなると、寄稿者の真意を失わしめないように気をつけながら、手を入れる必要があった。

第一、検閲に引っかかりそうな個所を、あらかじめ削除しなければならない。

せっかく書こうという気になり、しかも自分の体験したものである以上、もっと巧く、まとめたらどうなのだろう。

下手くそな、だらしのない悪文では仮令、「ＲＩＶＩＥＲＡ」がエロ雑誌であろうと、そんなに舐めないでもらいたいと憤りにも似た気持になってくるのだ。

だが、あくの強い強烈な刺戟の要素は、こうした下手くそな投稿に多く、少しでも名の知れた作家のには少いのだから仕末が悪い。

昨今の読者は単なるエロ小説に食傷して、なまぬるいものには刺戟を感じなくなっていて、惨虐、悲惨、目を覆わんばかりの、どぎつい亢奮を求めているのである。しぶしぶと編集長が赤鉛筆を走らせる結果となる。

全然、手を入れないで済むように、文体の確っかりした、しかも猟奇、変態の妖しい刺戟を湛えている。更に、発禁にならぬように巧みな技巧がこらしてある――こんな原稿はないものかと、虫のいい事を考えていた。

赤鉛筆の手を休めて、篠原は煙草に火を点じた。

ゆらゆらと物憂気に立昇る煙の中で、見るから精力的で直線的な魅力を持った編集長の中年の顔があった。不思議な事だが、こうした風俗雑誌の仕事に携わっている人達は、皆んな、普通の人より、どこか異っていると思われがちだが、実際はそうではない。

むしろ真面目な風格の人が多いものである。彼は、長い両脚をぽんとデスクの上に投げ出すと、先刻、郵送されて来たばかりの大きな封筒を開いた。

「黄昏の肉体」と大きく書かれた題目。

ペラペラと二、三頁めくって見る。

原稿の良し悪しは、これだけですぐ判ると彼は信じている。

そして、この場合、彼が始めから改めて腰を据えて読み出したのだから、気に入った証拠である。

2

波奈は盛りを過ぎた美貌のストリップテイザーである。

ある日、偶然、彼女は舞台の上から、客席の一隅で起った殺人を目撃する――という書出しも流暢であった。

波奈は舞台に上った時から、ある二人連れの客に注目していた。

社長タイプの肥満した中年の紳士と、女と見間違うような、色白の美青年が並んで腰掛けていたのである。

紳士は青年の肩を抱くような恰好をしており太い掌は、青年の華奢な手を優しく愛撫していた。

ソドマイト（男色者）

波奈は何か汚ないものを見たように一瞬、目をそむけ

たが、美しい青年が気になって仕方がなかった。
紳士は、青年の指先を握った。……
波奈はストリップを見ながら、変な仕草をする男をよく見て知っている。
だが、この変態紳士のように、男色者が、相手の手で亢奮を呼び起そうとしているのを見るのは始めてだった。
「おっ。男色か。流行だな」
篠原編集長は、苦笑する。
——次に、波奈が二人に視線を向けた時であった。
青年は紳士の耳の中に、何か小粒な丸いものを、押し込んだのである。
「おや」
波奈が不審に思う間もなく、青年は、つと席を立って姿を消す。
と、紳士の体がぐらりとゆれて座席の前にのめった。
「人殺し」
波奈は直感的にそう感じて叫声を上げた。
この辺りから探偵小説的な興味も加っていったが、それはあくまでもハードボイルドな非情極まりない描写であった。
さて、警察の連中も引上げ、波奈が自分の控室に帰ると、そこには件(くだん)の青年が、ひそんでいる。
先刻から青年の美貌に心を奪われていた彼女は、彼を匿(かくま)ってやる。
追われる明日なき男と、中年女の、ねばっこい愛慾の描写が書き馴れた筆に乗って妖しい亢奮を呼ぶ。
「ミッキー・スピレーンだな」
編集長は顔をほころばす。
波奈は、肉体だけが元手のストリップテイザーとして、己れの肉体の黄昏に人知れず焦慮していたので、早く足を洗い、恋しい青年と新らしい生活を始めたいと思う。
だが、青年にとってはしょせんこんな話は夢物語でしかなく、かつは、たるみかけた波奈の体を嫌って、同じ劇場のメリーという娘と出来てしまう。無論、メリーは、青年が大それた殺人犯だとは知らない。
疾妬に狂った波奈は、青年とメリーの殺害を企てるのである。
ありとあらゆる惨虐な復讐の図が、彼女の頭の中で描かれ行く。
「ホーカム（場当り）だ」
編集長は原稿から目を放して呟いたが、彼の目には、この原稿が活字になっている有様がありありと浮んだ。
「受けるぞ、こいつは。何しろ読者は犯罪がこの上もなくお好きだからな」

しかし篠原にはこの小説の底を流れる冷やかな人間軽視と、覆い隠すべくもない作者の自嘲、自虐のポーズに気がついていない。

ただ、長年の経験から、「受けるぞ」と感じ取ったのである。

一方、波奈の素振りから怪しいと勘づいた青年は反対に、夜の秘戯にかこつけて、女を殺してしまうのである。

青年は両の太腿で女の首をはさんで絞殺する。そして、女の首はそのまま、ぐにゃりとして彼の下腹にぶつかったというような恐るべき描写もあった。

「こりゃ発禁だぞ」

だが編集長は嬉しそうだった。

その時、青年は断末魔（だんまつま）の女に抵抗され、腿に深々と噛傷を記される。

小説の最後はこうである。

メリーが舞台で踊っている。

青年が、ふらふらと入って来ると蒼白な顔で、メリーを喰い入るように見つめている。ゆっくりと、アンチビタール系の毒薬を腿の傷に擦り込む。

この劇薬は人体の傷口から侵入した時にのみ急速に猛毒性を発揮する。

「ディクソン・カーの探偵小説にも、こんな種類の薬が出て来たと思ったが、はて、アンチビタールなどというのが、実際にあるのかな」篠原は首を傾（か）しげて考えたが、思い当らなかった。

青年が先に、中年の紳士（青年の勤めていた会社の重役であった）の、あくなき愛慾の手から脱れるために使用した薬もこれであった。紳士は中耳炎を患い、完全に治っていなかったのである。

探偵小説としても、かなり面白い着想である。

客席のざわめきで、メリーが舞台から飛んで降りると、今しも青年は、海老（えび）のように身を曲げて床の上に倒れた処であった。

編集長はこの幕切れが、すっかり気に入った。

同時に、全篇のプロットを肉付けしている悪魔の妖美な感覚に惚れ込んでいた。

「黄昏の肉体」は「ＲＩＶＩＥＲＡ」春の増刊号のトップに掲載された。

新進異色作家、淡美一郎はこうして特異読物界にデヴューした。

雪の夜の目撃者

（一）

二月の中旬だった。
夕方から降り始めた雪が、この地方では珍らしく積り、九時頃には十センチメートル近くになっていた。
人通りも絶え、時々、自動車と電車の警笛が、けたたましく闇に響いた。
共同タクシーの金子運転手は、ダットサンの新車を走らせていた。
やけに寒かった。
こんな夜の流しほど、くだらないものはない。
雪にハンドルを取られ、ブレーキはきかず、第一、呼びとめる客の姿すら判然としない。
ようやく客を見つけても、雪だらけのまま席に坐られ、その上、飛んでもない田舎まで行かねばならぬとあれば悲劇である。
金子は、なるべく客をひろわない事にし、早々引揚げてやろうと思った。
ダットサンは彼の物であり、そんな運転手がそれぞれ自分の車を持寄って共同タクシー有限会社というのを組織していた。
事故でも起したら、大変である。
彼は妻子があったので、むりをせず、車を駅前の我が家へ向けた。
そう心にきめると、無性にせかされた。
淡いライトの光を頼りに彼はスピードをあげた。
とある交叉点にさしかかった時、彼は、ふと前方に黒い人影を見た。
「危い！」
ブレーキをかけたが、車は、そのまま、突進した。
ブスリと不気味な手ごたえがかえって来た。
「しまった」
彼はドアをあけて外に飛び出した。
びっくりするほど冷たかった。
人が雪の中にうずくまっていた。
彼は懐中電灯で照らした。

白い雨靴が片方飛んでいた。
ナイロンの靴下が、ふっくらした脚線を浮きたたしていた。
オーバーがめくれて、寒々と太腿まで覗いて見えた。
ピクピクと両脚を動かしていた。
「大丈夫ですか」
彼は女を抱きかかえた。
すっぽり被ったマフラーを取った。
真赤だった。顔面が、くしゃくしゃにつぶれ、口だけが大きく開かれていた。
もぐもぐと口が動くと、ドッと血が吐き出された。
金子はあまりにも凄じい女の顔に、思わず手を放した。
「助けて……」
女が呟いたようだった。
金子はしばらく茫然と見下していた。
——病院へ連れて行くんだ——
——連れて行ってもだめだ、死んでしまう——
——警察へ届けるんだ——
——免許証を取り上げられるぞ——
「どうするんだ」
——誰も見ていない。このまま逃げるんだ——
金子の心に悪魔がこう囁きかけた。

彼は、めくれた女の太腿をオーバーで覆ってやった。
脱げた雨靴をはめた。
両脚をそろえてやった。
そして、車にもどると、気狂(きちが)いのようにスタートした。

（二）

雪でスリップしながら金子は無茶苦茶に車を飛ばした。
途中、手を上げた客があったが彼はとめなかった。
絶えず後から追っかけられているような気がした。
事故——一番恐れていた事実がやって来たのだ。
貧しい妻と子供の青ざめた顔が浮んだ。
「しかし誰も見ていなかった。こんな大雪の晩だから、誰がやったかわかるもんか」
そう考えると、いくらか気も落ついてきた。
綺麗な若い女だったろうに。
艶(なまめ)かしい脚をしてたっけ。ナイロンの靴下をすかして、形の良い足が小さく縮まっていた。
とたんに、目の先が真赤になった。
血だ。ぐしゃぐしゃに潰れた女の顔だ。思わず金子は両手で顔を覆った。

彼は血の気のない顔で我が家に入った。
子供は既に寝ていた。
「今晩は早かったのね」
向うを向いて炊事をしていた妻がひょいとふりかえった。
「お、お前は」
金子は、恐怖で両の眼をかっと見開いた。
わなわなと全身がふるえた。
妻は、顔中に繃帯をしていた。
血まみれの女の顔にオーヴァラップした。
くるりと向きをかえると彼はふらふらと雪の降りしきる表へ出て行った。
「あなた待って、どうしたの、火傷したのよ。テンプラを揚げてて油が飛んだのよ――」
妻が叫んだ。
「女をひいた」ぶつぶつ口の中で呟きながら金子は傘もさずず、当てもなく歩いて行った。
「ボーッ」
汽笛がひどく遠くで聞えた。
彼は、寒さも忘れてさまよった。
「兄さん、寄ってかないかい」
しわがれた女の声がした。
いつしか彼は紅灯の街に入り込んでいた。この大雪でさっぱり客もないのだろう。
「ね、兄さん。安くしとくよ」
やり手婆さんが金子の腕をつかんだ。
別に抵抗もせず、彼は、そのままずるずると上った。
「ひどく元気がないのね、どうしたの」
二十四、五の女が毒々しい化粧の下で笑っていた。
金子は恐怖を追い払うように、がむしゃらに女を抱き、気狂いのように狂い廻った。
「イヤ、イヤ、アーッ」
女は、ただならぬ叫び声をあげてしまった。
「すごいのね、兄さんは」
うつろな目で女が言う頃には、彼は、両手で頭をかかえ込んでいた。
「どうしたの、兄さん」
突如、金子がきっと顔を上げた。
「女を殺したんだ」
「エッ冗談でしょう」
女はずるずると後へ退った。
「本当だ。車で轢いたんだ」
金子は両手で眼の前を切るような格好をした。
死んだ女の幻を消そうとするかのようだった。

「それで警察に届けたの」
「ううん未だだ」
「病院には」
「死んでしまったんだ」
「届けた方がいいわ」
「免許を取上げられる」
「だけど、こんな大雪の夜ですもの。ひかれた方にも責任はあるわ」
女は事もなげに言った。
「とにかく届けるのよ。後のためにもその方がいいわ。一体場所はどこなの」
「交叉点の所だ」
「本当に死んでいたの」
そう言われると不安だった。
「見てくる」
金子はふらりと立上った。
「私も行ってあげる」
なぜか女は真剣な顔だった。

（三）

夜空に音もなく雪が降っていた。
「ウウッ寒む」
金子はブルブルと身震した。今頃になって始めて寒さを感じた。
後は二人とも物を言わずに歩いた。
交叉点の赤いランプがボンヤリ霞(かす)んで見えた。
「あの辺だった」男がボソリと言った。
「どこ、傘の処？」女が指さした所に一本の蛇(じゃ)の目が開いたままに置いてあった。
もう電車も自動車も一台も通っていなかった。
「変だな」金子はマッチをすって傘の中を覗いた。
「アッ」思わず、よろよろと倒れかけた。
「どうしたの」女が受け止めた。
「誰だ。誰か傘をさしていった……」
うわ言のように金子は呟いた。
女はマッチをすった。凄じい女の死顔がパッと目一杯に飛込んできた。
「誰か見てたんだ。警察に届けたんだ」

彼女は時報に殺される

（一）

瀬戸内海に面した典型的な小都会。緑の町、水の町として知られた風光だけが自慢の種だったが、御時勢で、最近は、小さいながらもテレビ放送会社が出来て、小高い丘の銀色に輝くテレビ塔が、その町の文化の高さを象徴するかのように聳えていた。

ＪＯＰＸ－ＴＶ（東邦テレビ）は映像一キロワット、音声〇・五キロワットというからそのサーヴィスエリア（可聴視範囲）は、殆んどその町を中心とした近隣の町村だけだった。

しかしプログラムの大半は東京、大阪の有力テレビを入中継していたから、プログラムに関する限りはなかなかの豪華版だった。

瀬戸内海の名物である夕凪もおさまって、そろそろ海から爽やかな潮風が町に吹いてくる午後十時前。

東邦テレビでは唯一のサスプロである、テレビドラマ「島の娘」の本番が迫っていた。

ラジオと違ってテレビドラマは殆んどが生放送だから、プロデューサーも俳優も、本番前に、幾度となくリハーサルを行っていたがそれでも不安で、落ちつかないのが普通だった。

「島の娘」のスタッフは、大きなスタ（スタジオの略）のセットに集まり十時の放送開始を待っていた。

Ａスタからは見えない小さな単独のアナウンス専用のＣスタでは瀬戸美江がレシーバーをはめて、マイクに向かっていた。

十時の時報前のスポットアナウンスと時報後のコマーシャルを入れるためだった。

美江は女子アナウンサーとして去年入社したばかりだったが、その清潔な澄んだ声は誰からも好かれた。

容姿もその声にふさわしく見るからに清純な美貌と、小柄だがよく均勢のとれた肢体をしていた。

ガラス越しのＣスタの副調には誰もいなかった。

十時に三〇秒前、目の前に赤いランプが点いた。アナウンス開始の合図である。

「ＪＯＰＸ－ＴＶ、こちらは皆様の東邦テレビでございます。間もなく十時になります。
精巧社の時計が時報をお知らせします」
美江はそうアナウンスをして時報を待った。
「プッ、プッ、プッ、ピーン」
千サイクルの鋭い最後の音がレシーバーから聞かれた――その瞬間、美江の口から「アッ‼」という悲鳴とも何んともつかない断末魔の叫びがもれ、そのまま、がくりと前へのめってしまった。
主調から若い技術員が血相を変えて飛んで来た。時報後のコマーシャルが入らないと、Ａスタへ放送開始のキューが送れないのだ。
見ると瀬戸アナウンサーは、マイクを置いたデスクにもたれて身動きもしなかった。
貧血でもおこしたと思った。
その若い技術員の若山は咄嗟の判断で、Ｃスタの副調から電話で主調に「島の娘」を予定通り開始するように云うとスタジオへ飛び込んだ。
「瀬戸さん、どうしました」
体を抱き起そうとすると美江は、ずるずると椅子から滑って床に崩れ落ちてしまった。
大きく見開かれた眼は既に凝固し、完全に息絶えていた。
若山はすぐアナウンサールームに急を告げた。
忽ち社内は大騒ぎになった。
既に帰っていた幹部連中も慌てて駈けつけて来た。
しかしＡスタのドラマだけは好調に進行していた。
スタジオを全部見下せる副調に陣取った、未だ若いプロデューサーの藤本は、台本を睨みながら、カメラマンへ指示を与えていた。
と、アシスタントが駈け込んで来て、瀬戸アナウンサーが怪死したと告げた。
一瞬、藤本はびっくりするような声で聞き返した。
「瀬戸さんが、――そんな馬鹿な、間違いじゃないか。本当にか」
アシスタントが大きく頷くと、見る見る藤本の顔色が蒼白になり、手の先きが小刻にふるえ出した。
Ａキャメラへ出すべきキューをＢキャメラへ出したりして場面の転換は、忽ちしどろもどろになった。
慌てたアシスタントのプロデューサーが機転をきかせて藤本に代った。
藤本は、物も云わずに副調を飛び出して行った。
「無理もないね、藤本さんは、瀬戸ちゃんと結婚するんだったんだから」

スタッフは、藤本プロデューサーに同情を惜まなかった。

（二）

直ちに警察本部から太田原警部を始めとして多数の係官が到着した。

午後十時に社内にいた者は全部、足止めを喰い、捜査が開始された。

全部といっても一般の社員は夕方、帰宅しているので、その時刻に残っている者は、技術、アナウンサー、プロデューサーなど一部の者だけだった。

Cスタの美江の屍体はそのままにしてあった。レシーバーをはめたまま花びらが散ったような可憐なそれだけに一層あわれな死の姿だった。

相当に年配の警察医は、ずり落ちそうな眼鏡を絶えず気にしながら検死した。

「うん、こりゃ感電死じゃ。強い電流がこのレシーバーから流れたのじゃ」

「しかし……」

最初の発見者である若山が口を差しはさんだ。

「……このレシーバーには、人が死ぬような電圧はかかりません。2～3ボルト位いですからね」

「それが明らかに感電して死んでいるんじゃから仕方がない。見なさい。このレシーバーの中のコイルが焼け切れているじゃろう」

「すると先生。誰かが、わざとしたんですね、この副調にはそんな高い電圧をとる機械はありませんから」

「そりゃ、わしは知らんな。君達の方が詳しかろう。だがなわしは医者として云うが、確かに、千ボルト以上の電圧が働いてこの人は死んだんじゃよ」

警察医は、片手で眼鏡をささえながら権威を持ってそう断言した。

太田原警部は、まず若山から屍体発見当時の模様を聞いた。

「なるほど、それで、いつもはこの副調に誰かいるのですか」

「ええ、いるはずなのですが、私が飛んで来た時は誰もいませんでした」

「すると今夜のスタの副調勤務者は誰だったんですか」

警部は鋭い目でじろりと一同を見廻した。

「私ですが……」

眼鏡をかけた山下技術員だった。

「貴方は副調にいなかったのですね」
「はい。丁度、自家発電機の調子がおかしいので地下室へ見に行っていたのです。よくこの頃、停電しますので、もしも十時からの〝島の娘〟の放送にさしさわりがあるといけないと思って見に行きました。帰って見ると、この騒ぎです」
山下は落ちついた態度で答えた。
「何かの過ちで、強い電流が、このレシーバーに流れるという事はあり得ませんか」
警部が聞くと山下はきっぱりと、
「絶対にあり得ません。もしも、瀬戸さんが感電死したのなら、誰かが故意にやったに違いありません」
と云い切った。
急に、一同の間にざわめきが起った。
と、その時、レシーバーの配線関係を調べていた鑑識係が警部に何か耳打ちした。
警部は大きく頷いて、山下に鋭い一瞥をくれた。
「放送機から直接二千ボルトの電圧をこのレシーバーにかけたらしいのです。そんな高い電圧をかければ、いくらエボナイトで絶縁してあるレシーバーでも一たまりもないでしょう。そして、どうやら、その操作は、この副調でやったらしいですな」
皆んなが一っせいに山下の方を見た。
その夜のCスタ勤務者は彼だけなのである。
そして皆んなは、山下がかつて瀬戸アナウンサーに恋し、不幸にもその愛が報いられなかった事を知っていた。
「山下君でしたか、貴方だけ残って下さい。他の方は一応、家へお引取り下さい。後刻参考人としてお呼びするかも知れませんが」
太田原警部は、今夜、一晩中かかって、山下を徹底的に洗ってやろうと思った。
犯人は技術屋だ——鬼警部と謳われた太田原の頭にぴーんときた第六感だった。
美江の屍体は大学病院にはこばれて、解剖される事になった。
警部は、部下がとったその夜の人々の供述書をめくって読み始めた。
それによると瀬戸美江は、浮いた噂のない、大人しい娘だった。
勿論、あれだけの美貌の持主だったから、いろいろと言い寄る男は多かったが、云々されるようなスキャンダルは一つもなかった。
強いて注目すれば、山下が猛烈に彼女を愛した挙句、失恋した事と、プロデューサーの藤本とは、どうやら相

解　題

日下三蔵

今回、（論創ミステリ叢書）から三冊の作品集が刊行されて、そのミステリの分野における業績が集成されることになった川野京輔は、不思議なポジションの探偵作家である。兼業作家で文庫本も出ていないから、よほどのマニアでなければ名前は知らないと思われるが、活動のスパンが長く、ミステリ短篇集が五冊も出ている。本業でラジオドラマの制作に長く携わっていたためにＳＦ作家とも親交があり、探偵小説と勃興期のＳＦをつなげる役割も果たしている。

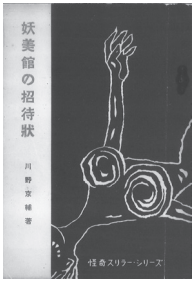
その経歴については、第一巻の小谷さえり氏の解題に詳しいので、ここでは割愛し、日本推理作家協会の公式サイトに掲載されているプロフィールをご紹介しておこう。

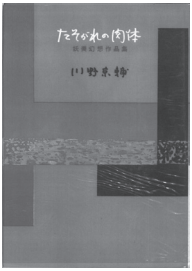
広島生まれ。中央大学法学部卒。昭和二九年ＮＨＫ入局、ラジオドラマの演出担当、平成三年定年退職後はフリーの脚本・演出家としてＮＨＫ「日曜名作座」担当。昭和二八年「宝石新人二十五人集」の「復讐」でデビュー「宝石」「探偵倶楽部」「探偵実話」などに作品を発表した他、歴史小説、レコードの作詞など多数、映画化された作品も多い。代表作「コールサイン殺人事件」「王朝哀歌」など。

大学卒業前の一九五三（昭和二十八）年から性風俗雑誌、探偵小説誌に投稿を始めた川野京輔は、入選、採用の常連となるが、専業作家への道は選ばず、五四年にＮＨＫに入局した。数多くのラジオドラマの演出を手がける一方、雑誌や新聞にも兼業作家とは思えぬペースで作

品を発表している。

中・短篇をまとめた作品集には、以下の五冊がある。驚くのは専業作家でもなかなか短篇集が出なかった昭和三十年代前半に、薄いものを含むとはいえ四冊もの本が出ていること。同時期に活動していた探偵作家の中でも、この数はかなり多い。





A．妖美館の招待状　56年1月　品川書房
［妖美館の招待状／雪の夜の目撃者／パノラマ館の来訪者／夜行列車の見知らぬ乗客／深夜の令嬢／外人部隊脱出／エル・リコの叛乱］

B．犬神の村　58年3月　放送文芸社
［犬神の村／探偵小説とラジオドラマ／放送劇の空想音／放送局と私］

C．たそがれの肉体　59年7月　あまとりあ社
［おそろしい囁き／童貞作家／犬神部落の幽鬼／三十一号国道の裸女／あわれな女／青い亡霊／夜行列車殺人事件］

D．消えた街　59年9月　東洋文芸社
［消えた街／団兵船の聖女達／狙われた女／コールサイン殺人事件］

E．コールサイン殺人事件　94年2月　広済堂ブルーブックス
［消えた街／団兵船の聖女達／狙われた女／コールサイン殺人事件／彼女は時報に殺される／女性アナウンサー着任せず／夜行列車殺人事件／青い亡霊］

本書には、Bを除く四冊に収録された二十篇のうち、既に第一巻に収録されている「妖美館の招待状」「パノラマ館の来訪者」の二本を除いた十八篇をすべて収めた。底本には可能な限り初出誌を使用し、著者による修正の入った切り抜きをまとめた手製本を参照している。

Aは文庫サイズのペーパーバックで、表紙および扉ページには「怪奇スリラー・シリーズ」と書かれている。

奥付には発行所「品川書房」の所在地として港区芝下高輪と広島市大手町の住所が併記されている。東京の地名を採って品川書房としたものと思われるが、実際には著者の広島時代の知人の出版社であり、探偵小説を書いているなら本にしないか、と声をかけられたものだという。

Bは新書サイズよりやや小さい判型で、五十ページほどの小冊子。表紙には「パールブック　№1」の記載がある。放送文芸社は月刊誌「放送文芸」を発行していた広島の出版社で、川野京輔は同誌のレギュラー寄稿者であった。奥付の「発刊について」には、シリーズの企画意図について、「小社では純文学大衆小説を問わず、郷土在住の作家や郷土出身の新人作家の珠玉の如き、中編（一〇〇枚程度）をこの小さな冊子におさめて次々に世に送り、文学に志す人々の奮起を切望する」と書かれている。

本書にBの収録作品が入っていないのは、単に存在が確認できたのが遅かったためなので、中篇「犬神の村」については、二〇一九年に刊行される予定の第三巻でフォローしたい。なお併録された随筆三篇のうち、「探偵小説とラジオドラマ」は第一巻所収の「探偵小説とドラマ」と同じものであった。したがって第一巻の解題で同作を単行本未収録としたのは誤りだったことになる。ここに記して訂正いたします。

「妖美幻想作品集」と銘打たれたCの版元あまとりあ社（＝久保書店）は、「あまとりあ」「裏窓」などの性風俗雑誌を発行していた。同社のソフトカバー単行本シリーズには、探偵作家の作品が数多く含まれており、川野作品の他にも、大河内常平『夜に罪あり』（57年12月）、朝山蜻一『悪夢を追う女』（58年9月）、岡田鯱彦『あやかしの夜』（58年10月）、狩久『妖しい花粉』（58年12月）、矢野徹『甘美な謎』（58年12月）などが刊行されている。

Dは本格系の作品を集めた百五十ページほどの作品集。九〇年代に入ってから新書ノベルスとして刊行されたEに、そのままの配列で再収録されており、著者にとっても自信のある作品群であることがうかがえる。そのEには、著者と同じくNHK出身のミステリ作家・辻真先氏が解説を寄せている。今回、辻さんのご厚意により、この解説は本書にも資料として再録させていただいた。

ここでミステリ短篇集以外の著書をリストアップしておこう。ご覧の通り、内容が多岐にわたっており、筆者の気づいていない著作のある可能性も高いが、現時点での調査では、これが精一杯であった。

［著者］**川野京輔**（かわの・きょうすけ）
1931年、広島県生まれ。本名・上野友夫。53年より『千一夜』や『風俗草紙』へ短編の投稿を始め、同年末には『別冊宝石』の懸賞に本名で応募した「復讐」が掲載され、事実上の作家デビューとなる。中央大学法学部法科卒業後、54年にNHKに入局。広島中央放送局放送部、松江放送局放送部を転任した後、60年に東京勤務となり芸能局へ配属される。広島中央放送局在職中に広島中央局長賞を受賞した。アナウンス室で事務業に従事した時期もあったが、芸能局には合計27年在籍した。91年にNHKを定年退職。日本推理作家協会名誉会員。

［再録解説］**辻 真先**（つじ・まさき）
1932年、愛知県名古屋市生まれ。名古屋大学文学部卒業後、54年にNHKへ入局。57年に『傑作倶楽部』へ「悪魔の画像」を発表するが、本格的な執筆活動は62年のNHK退局後となり、アニメ脚本を執筆しながら『宝石』や『漫画文芸』へ桂真佐喜などの筆名を用いて精力的な執筆活動を展開した。81年に「アリスの国の殺人」で第35回日本推理作家協会賞を受賞、2009年には牧薩次名義の長編「完全恋愛」で第9回本格ミステリ大賞を受賞。日本推理作家協会名誉会員。

［解題］**日下三蔵**（くさか・さんぞう）
1968年、神奈川県生まれ。専修大学文学部卒。ミステリ・SF研究家、アンソロジスト、フリー編集者。日本推理作家協会、本格ミステリ作家クラブ各会員。著書に『日本SF全集・総解説（早川書房）、『ミステリ交差点』（本の雑誌社）。主な編書に「日本SF全集」（全6巻、出版芸術社）、「ミステリ珍本全集」（全12巻、戎光祥出版）など。編著『天城一の密室犯罪学教程』で第5回本格ミステリ大賞を受賞。

川野京輔探偵小説選Ⅱ（かわのきょうすけたんていしょうせつせん）　〔論創ミステリ叢書116〕

2018年10月30日　初版第1刷印刷
2018年11月10日　初版第1刷発行

著　者　川野京輔
装　訂　栗原裕孝
発行人　森下紀夫
発行所　論創社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254　振替口座 00160-1-155266
http://www.ronso.co.jp/

印刷・製本　中央精版印刷
組版　フレックスアート

©2018 Kyosuke Kawano, Printed in Japan
ISBN978-4-8460-1738-5